

『我が月神に祈れ』

澤田金太

【登場人物表】

- 川瀬智明（50） 元オウムの役所派遣社員
- 瓜生（39） タレント県知事
- 我孫子（61） 月読市長
- 雨野（42） 県警公安課長
- 猿田孝彦（68） 元県知事
- 稲葉（40） 自称復興コンサルタント
- 岐部（28） 稲葉の部下
- 青山（18・女） 稲葉の部下
- 小国（81） 月読市の大地主
- 望月大道（45） 黙正教夢見の会の教主
- 近江照子（32） 夢見の会の元幹部
- 橋本良秀（34） 夢見の会の信者
- 田坂兄弟（24） 夢見の会の双子信者
- 櫛田（43・女） 夢見の会女性信者
- アルテミス（28・女） 夢見の会の幹部
- プロメテウス（33） 夢見の会の幹部
- ヘルメス（39） 夢見の会の幹部
- 北原さち（93） 臨睡宗二代目教主
- 北原みち子（70） その娘

剣持浩三（59） 公営災害住宅地住民  
井坂（56・女） 公営災害住宅地住民  
彦根（62） 国土交通大臣  
曾我部（72） 保守系政治団体の会長  
きんぴら（25） ユーチューバー  
梅津（37） テレビディレクター  
野村（48） 市役所の市民課課長

【あらすじ】

東日本大震災から十年弱、被災地の東北地方某県月読市では沿岸地区の復興が一向に進まず、その地にIRRリゾートを誘致する復興計画を公約に掲げたタレント知事・瓜生が知事選で圧勝する。IRR構想の実現のため瓜生は復興コンサルタントを自称する男・稲葉に市のPRを依頼する。稲葉が目をつけたのは月読市に伝わるツクヨミ信仰。ツクヨミを賭博の神だとする架空の伝承をでっち上げることで与党政治家と繋がりのある保守系の政治団体の関心を引き、IRR招致レースで優位に立とうとするのであった。

そんな折、瓜生と地主の口約束で用地確保が済んだと思われた月読市沿岸地区に、ツクヨミを信仰し睡眠を宗教実践の柱とする新宗教団体・黙睡正教夢見の会の総本部の建設が始まり、安眠の地を求める信者たちが市に移転してくる。地主はその会の信者なのだった、

IRR構想の頓挫を恐れた瓜生は夢見の会の

追い出しに着手し、稲葉は元オウム信者の過去が何者かによって密告されたことで市役所の派遣社員の職を失った川瀬智明に夢見の会への潜入を指示する。こうして県と夢見の会の対立が徐々に先鋭化する中、次期知事の座を狙う前県知事の猿田、影響力の拡大を狙う県警公安課の雨野、教団運営方針に不満を持つ元教団幹部の近江らが騒動に乗じて動き始め、情勢は白熱、混乱してくる。

稲葉が自分たちの行った数々の工作と瓜生との関係をSNSで暴露したのはそんな時だった。彼と部下たちは最初からIR誘致には興味がなく、各々異なる思惑を持って瓜生に近づき、彼を利用し、貶めたのであった。

瓜生は知事の座を追われ教団は権力闘争の末に地元住民の多くを連れて県外に移転した。月読市を食い物にした連中は去り町に静けさが戻ってくる。稲葉と教団の駒にされた川瀬はその経験をオウム時代と重ね合わせ、オウム時代には収監されていたため叶わなかった、

教団施設の撤去を見守るために月読市に残る。騒動が残したゴミを彼がたった一人で掃除している、騒動を冷めた目で傍観していた地元住民・剣持浩三が声をかけ、二人は共に騒動の後始末をするのであった。

## ○エピグラフ

Ｔ…人民の土地をわが月神に奉れ  
われに献ずれば福慶があらう

『日本書紀 顯宗記』

○Ｔ… 2019年5月

## ○震災伝承館

東日本大震災の被災地である東北地方のどこか、月読市。その震災伝承館の一角に沿岸地区を建設予定地とする I R リゾートの建築模型がある。そこは I R 誘致のために設けられた P R コーナーになっており、建築模型の他にもスロット台やルーレット台のレプリカ、大会議場やショー会場の広さを体感できる V R や P R 映像の流れるモニター等がある。

それらを県知事の瓜生（39）、月読市長の安孫子（61）、復興コンサル

タントの稲葉（４０）の三人が、地元  
の大地主・小国（８１）に見せて回っ  
ている。施設内に他に人はいない。

安孫子「マスコミはカジノカジノと騒ぎます  
けれども、あんなのは何もわかつちやいな  
い、我々が求めているのはあくまでビジネ  
ス拠点も兼ねたリゾートですからね。

震災前のあの活気に満ちた月読市を取り戻  
したい。我々の思いはその一点。もうそれ  
だけです。ＩＲがあれば世界中からお客様  
がやって来る、お客様が来れば雇用ができ  
る、雇用があれば若者だって戻る！ あれ  
以来バラバラになった町がまた一つになる  
んです！ 間違いない！」

興味のなさそうな小国。ＩＲの建築  
模型に置かれた若者や外国人観光客、  
ビジネスパーソンや赤ん坊を連れた  
家族等々の人形を見ながら、

小国「戻ってきて、私らがなんか得しますか。  
静かに余生を過ごしたい年寄りには

おらんようだね」

安孫子「いや、あの、その点はこちらの稲葉さんが、えー、ま、いわば復興コンサルタントですから、もちろん、住民の方を蔑ろにするようなことはございません！」

小国「またコンサルタントか」

小国、瓜生を見て、

小国「あんだ、知事になったらもうテレビ出ないの？ ほらあの、あの刑事ドラマ、うちの女房が好きだったんだけどね」

瓜生「（方言で）復興協議会の顔役のあなたにこんなことを言うのも失礼かもしれないが、私はこう思うんです。年寄りはどうだっついていい。でも若い者はどうなりますか。彼らに未来を残す責任が我々にはあるんじゃないですか」

安孫子「知事！」

瓜生「（方言）町の人間はあなたたちを震災貴族と呼んでいると聞きました。私だってバカじゃない、その意味はよく理解してる

つもりです。町をどうするかは震災貴族が決めることだ、これが月読市の復興を妨げる理由の全てじゃないですか。自分たちには何もできない、自分たちの声は誰も聞かない、そんな絶望の中で育った子供たちがどうなるか、あなただって知らないわけじゃあないでしょう」

安孫子「知事！ いい加減に怒りますよ！ 申し訳ありません小国さん」

ルーレット台を眺めながら考え込む小国。

瓜生「この町には観光資源が何もありません。他業種とのシナジ―も期待できそうにない。おまけに空港からも遠い。今のところこの町が国のIR候補地に選ばれる可能性は限りなくゼロに近いでしょう。しかしだからこそ、我々は挑戦しなければならぬと思ってる。あなたが我々に土地を預けてくださいれば他の震災貴族も踏ん切りがつく。小国さん、あなたの土地が必要です」

安孫子、ニヤけた顔で小国を見ながら  
ルーレットを回して、ボールの投入を  
促す。小国、ボールを投入する。

安孫子「お、見事なものですねえ」

小国「昔はよく女房とラスベガスに行ったよ。

私はね、ルーレットは強いんです。どっ

ち？ 赤か、黒か」

瓜生「黒」

安孫子「じゃあ、私も黒！」

小国、瓜生と安孫子から少し離れた

ところに立っている稲葉を見て、

小国「あんたは」

稲葉「赤」

○避難タワー・外非常階段く屋上（夕）

息を切らしながら階段を上っている

稲葉、その部下の岐部（28）、青山

（18・女）。

岐部「折れるもんですねえ。でかい利権なん  
じゃないですか」

稲葉「利権と言っても涸れた油田のようなものじゃないか。ただ持ってたって出てくるのは虚栄心ぐらいいさ。前知事の猿田はもういないし、義理立てする必要もない」

岐部「哀れな末路っすねえ。市民主導の復興か。結局は行政の責任放棄でしょう。沿岸地区の用地取得もしないで復興交付金で建てたのはこのいかつい避難タワーと地主連中の復興協議会ですか。あれ、本当なんすか、交付金が前知事の懐に流れたって」

稲葉「さあ。まあでも、協議会が前知事から身の丈に合わない権限を与えられたことは間違いないし、そんな人間が親分に逆らうことはありえない。実際前回の知事選では奴ら揃って前知事支持を表明したよ。それが住民たちの不興を買って現知事の新人としては驚異的な得票率に繋がった」

青山「なんで協議会ってそんなに恨まれてるんです？」

岐部「お嬢ちゃんだねえ青山ちゃんは。政治

も世間もろくに知らない田舎の地主の爺様どもに金と権力だけ渡して、何が起こるかなんて分かるじゃないの」

稲葉「実際に金が懐に入ったかどうかなんてどうだっていいんだよ。懐に入ったと思えば投票行動の動機付けになる。悪い神さまを追い出して良い神さまに来てもらおう」

青山「及ばぬ鯉の滝登り」

岐部「なにそれ？」

稲葉「形だけってこと。ここでは全てがそうなのさ」

屋上に着くと三人は月読市の沿岸地区を一望する。稲葉は双眼鏡を取り出して獲物を物色するようにそれを覗く。巨大な防潮堤の向こうに広がる静かな海。船の音も鳥の鳴き声もない。

防潮堤に守られた沿岸地区はかさ上げされ、三人が立つ六階建て程度の避難タワーを除けば何も建物のない、広大な更地となっている。高台に目を向け

ればまるでジオラマのような災害公営住宅地がある。沿岸地区の住民たちはそこに集団移転しているが、まるで人がなく、静か。

稲葉「良い眺めだ。カジノさえ建たなければ絶景だね」

スマホを取り出す岐部。

岐部「記念撮影しときますか。チーズ」

沿岸地区を背にして三人は記念写真を撮る。

青山「それで、どうするんです？」

稲葉「そうだねえ」

稲葉、山の方に視線を移して、森に埋没した月読神社があるのを見つける。

## ○月読神社

普段着の宮司が稲葉たち三人に無人神社の月読神社を案内している。

かつて威容を誇ったであろう神社は今や苔と蔓と肝試しのヤンキーが残して

いったゴミに覆われ、ほとんど廃墟と化している。

宮司「まあ、祭祀の時に開くぐらいなものですから。宮司と言っても名ばかりですよ」

稲葉「大変でしょう、一人でいくつもの宮司を兼務するのは」

宮司「ははは、他に成り手もいませんから。氏子ももうおりませんし、私の代で終わりです。ここは忘れられたお社なんですよ。祭神はツクヨミノミコトですが、ミハシラノウズノミコ、黄泉の国から戻ったイザナギの穢れから生まれた神々ですね。アマテラスオオミカミ、スサノオノミコト、ツクヨミノミコト。ま私らはツクヨミと呼んでいますすけれども」

稲葉「ツクヨミですか」

宮司「ええ。で、アマテラスオオミカミは皇祖神、神武天皇のご先祖様ですから、記紀神話ではいわば重要な役者です。ご存じでしょうがこれはスサノオノミコトも変わ

りません。にも関わらず二人のきょうだいであるところのツクヨミノミコトの記述は記紀神話では非常に少ない。ですからどのような神なのか具体的なことは今となってはわからないわけです。お社同様に、忘れられた神、と言えるかもしれませぬ」

宮司、捨てられたジュースの缶を拾う。

## ○アパート・フリーター男の部屋

ゴミだらけの汚らしい部屋でパソコンに向かっているフリーター男。クラウドソーシングサイトで仕事を探していた男は、「神話の記事を書いてくれる方、大募集（文字単価15円）」の依頼を見て、身を乗り出す。

## ○レンタルオフィス・個室

カップコーヒーを手にした岐部が席に戻ってラップトップPCを見ると、フリーター男から応募が来ている。

岐部がそれに目を通してしているとチャットアプリのポップアップ通知。へウイキペディアの依頼記事、納品しましたのでご査収下さい

岐部「少しは仕事を選ぼうよ」

### ○パソコン画面

クラウドソーシングの記事依頼の執筆マニユアル画面。へ原稿は必ずウイキペディアやまとめサイトなど複数のサイトをソースにしてください

### ○アパート・フリーター男の部屋

カメラが引くとフリーター男の部屋。彼はブラウザで開いていたマニユアルのタブを切り替え、ウイキペディアを見る。そこにこんな一文を見つける。へまた、月読イツキを読むことから、江戸時代には博打の神として庶民の間で人気を博した

その文言をコピーするフリーター男。

### ○カラオケ・大個室

十人ほどの大学生男女が合コン中。  
派手に盛り上がっているが青山だけは  
輪に加わらず一人悠然と本を読んでいる。  
そこに青山の所属するサークル・  
日本文化研究会の部長がやってくる。  
部長「ねえ青山ちゃんさ、これね、まあこう  
いう場じゃないと言いくいから今言っちゃ  
うけど、新生生にはOBのおじさんの集  
まりにも行ってもらってるのね」

青山「おじさん？」

部長「そうおじさん。みんなそう！ みんな  
そうよ！ これ青山ちゃんだけじゃなくて  
俺だって一年の時に行かされたから。まあ  
嫌だとは思うけどさ、そこがウチのサーク  
ルの（お金のジェスチャー）これ出してく  
れてんのよ。頼めるかな？」

青山「待てば海路の日和あり」

## ○イベントホール

政治団体へ八百神の伝統を守る会へのシンポジウムが開かれている。テーマは「薄れゆく八百神の記憶を次世代にどう継承するか」。現在、会長・曾我部（72）を中心としたパネルディスカッション中。壇上には高齢の男性たちに混じって青山がいる。

曾我部「やっぱりね、売国メディアが報じない、これ非常に大きいですね。そういう意味では私はインターネットで真実に触れる若者たちに非常に希望を持ってる」

## ○タクシー車内（移動中）

稲葉がスマホでウィキペディアや複数のまとめサイト、ツイッターなどのSNSを見ている。それぞれのサイトに書かれた情報は循環参照されており、どのサイトにも「ツクヨミは賭博の

神〱といった文章が書かれている。

### ○ファストフード店

ユーチューバー・きんぴら（25）と  
マナージャーが話している。

マナージャー「で、これ外注企画なんですけど、きんぴらさん江戸時代的なものって

興味ありますか？」

きんぴら「ええ、ええ、あります、はい。人  
並みですけど」

### ○ユーチューブ動画

きんぴらが「きんぴら大学」チャンネルの雑学動画で江戸時代から伝わる賭け事のマナーなるものを紹介している。その内容は丁半と月の満ち欠けに関するもの。

きんぴら「ですから、満月の時にはツキを讀んでアマテラス、余ってるやつ、丁半のうち余っている方をあえて選ぶことが江戸時

代のギャンブラーのへいきぐだったんです  
ね」

カメラが引くとユーチューブの検索窓  
に「ツクヨミ ギャンブル」の文字。  
その下にはきんぴらの二番煎じの類似  
動画が山のようにヒットしている。

### ○都心の書店

書店員が新書コーナーに新刊「江戸に  
学ぶギャンブルのへいきぐ」を平積み  
にする。それを手に取った客が裏表紙  
を見ると、「八百出版」の社名が目  
に入る。

### ○参議院・予算委

野党議員が総理大臣を激しく追及して  
いるが、国土交通大臣の彦根（62）  
はそれを尻目に居眠り中。

### ○パーティー会場

八百出版社主催の新刊新書「ギャンブルの未来は日本神話にあった」出版記念パーティに彦根も来ており、著者のきんぴらが曾我部、青山と歓談中。

曾我部、きんぴらと青山の肩に腕を回して、

曾我部「こうやってね、若い人が関心を持ってくれる。これが一番ありがたい」

そこに稲葉が通りかかって、

青山「あ、稲葉さん」

稲葉、偶然会った風を装って、

稲葉「おーおーおー青山。なんだ来てたの」  
オードブルを食べるのに忙しい彦根、

興味なさそうに、

彦根「お知り合いですか」

青山「大学の方で東北復興のプロジェクトを一緒にさせてもらってます」

稲葉「どうも初めまして、稲葉と申します」

○レインタルオフィス・会議室

ホワイトボードに書かれた達成目標を次々と消していく稲葉。ウィキペディア、まとめサイト、SNS、YouTube、マナー講座、新書、ラジオ、ゲーム、政治団体、政治家（国交相）、テレビ……そこで稲葉の手は止まる。椅子に座った岐部と青山がホワイトボードを眺めながら、

岐部「どっから攻めましょか」

稲葉「（振り返って）攻める必要なんてないさ。向こうが勝手にやってくれる」

### ○クイズ番組

〈賭博の神として知られる日本神話の神の名前は？〉という問題の答えとしてツクヨミが出る。

大袈裟に喜んだり嘆いたりする回答者のタレントたち。

### ○月読市・沿岸地区

瓜生・我孫子らと海外IR業者たちが  
通訳を交え、IR完成予想図の表示  
されたタブレットを片手に広大な更地  
を眺めて話している。

我孫子「ここは、神話！ あー、ユニバー  
ス？ 神様のいるところですよ！ 賭博の  
神様！ ツクヨミ！ ユーノウ？」

瓜生が流暢な英語で補足説明する。業  
者も納得した様子で頷く。

と、大きな音を立てて建築資材や機材  
を載せたトラックが何台も道の向こう  
からやってくる。不思議そうにそれを  
眺める一同。

○県庁所在地の市役所・窓口フロア

窓口の派遣社員・川瀬智明（50）が  
老婆の苦情を受けている。

老婆「だって気持ち悪いじゃないですか。い  
きなり集団で移り住んできて。中で何やつ  
てるかわかったものじゃない」

川瀬「こちらは交付窓口です。生活課の方へどうぞ」

老婆「あなたね、他人事だと思っただね」

川瀬「申し訳ございません。申し訳ございません」

川瀬が謝っていると、苦情電話を受けていた女性職員が怪訝そうな目で川瀬を見る。川瀬、視線に気付いてふとそちらを見る。

### ○市役所の外・職員通用口

人目に付かないよう建物の影に隠れてタバコを吸っている川瀬。

### ○市役所・廊下

タバコ休憩から戻った川瀬が廊下を歩いていると課長・野村（48）が呼び止める。

野村「川瀬さん、ちょっと」

○同・喫煙室

タバコに火をつける野村。川瀬にも  
勧める。

川瀬「吸わないんですよ」

野村「嘘だあ。いつも外で吸ってるじゃん」

川瀬「……わかりますか」

野村「わかるよ、そりゃあ。ここで吸えばい  
いのに」

笑顔を浮かべる野村。川瀬も作り笑いを浮かべて、観念したように自分もタバコを吸う。

沈黙。紫煙が二人の間に薄い壁を作る。

野村「隠してることはそれだけ？」

川瀬「何がですか？」

野村「いや、何もなかったらいいんだよ。何もなかったらいいんだけどさ、さつき変な苦情電話がかかってきたらしいんだよね。川瀬さん、オウム真理教の信者だったって本当？」

答えられない川瀬。

野村「宗教はさ、自由だからいいんだけど、それで刑務所入ってたってなると……いや、川瀬さんが真面目に働いてくれてるのは分かってるけど、嘘をつかれたらさ、ほら、やっぱり役所って信用第一だから。本当は川瀬さんの派遣元にも言わないといけないけど、それは黙ってておいてあげるから、その代わりっちゃやなんだけど、川瀬さんの方から辞表出してくれないかな」

川瀬「結構ですよ。派遣会社にも言ってください。嘘つきましたから。嘘つきはテロリストの始まりですよ。オウムみたいに」

### ○大黒邸の門前

揃いのジャージを着た坊主頭の双子の男、田坂兄弟（24）が門番のように立っている。やる気のない警官二人を引き連れた我孫子が彼らに抗議中。

我孫子「あなた達に用はないんだよ。小国さんに会わせて欲しいって言ってるんだよ」

田坂兄「いま眠っているんです」

我孫子「一日中眠ってるっていうの？ そんなわけないだろう！」

我孫子、パトカーの傍らに突っ立って事態を見守っている警察を見て、

我孫子「突っ立ってないで早くこれをどうにかしてくれ！」

警官1「嫌疑はなんですか」

我孫子「拉致監禁だよ！ こいつら小国さんを中心に監禁してるんだ！ 見りゃ分かるだろう！」

と、小国がベランダに現われて、叫ぶ。

小国「うるさい！ 眠れないだろう！ さっ

さと帰れこのタヌキジジイ！」

ピシヤリと戸とカーテンを閉める小国。

我孫子「自分だってジジイじゃないの……」

あくびをする警官2。

田坂弟「眠たいですか？」

○県庁・知事室

瓜生、我孫子、稲葉、県警公安課長・

雨野（42）が会談中。雨野、田坂兄

弟が我孫子の抗議を受けている光景の  
プリントされた紙を他の面々に配って、

雨野「黙睡正教夢見の会。ま、カルト宗教で  
すわな。前身は戦前の地方新宗教で、眠り  
教として当時は知られていたらしい」

我孫子「眠り教？」

雨野「眠るんですよ。果報は寝て待って言  
うでしょう。まあ、眠れば身体の調子もよ  
くなる。それを奇跡と称して当時はそれな  
りに隆盛を誇ったようですが。これ、現  
教団代表」

教団ホームページに載っている代表・

望月大道（45）の写真をプリント

アウトしたものを見せる。

雨野「見た夢の内容を話せば過去と未来を教  
えてくれるんだとか」

瓜生「国土利用計画法は。審査名目でとにか  
く一時的にでも工事を止めたい」

我孫子「贈与、だそうでした……」

雨野「贈与であれば国土利用計画法に基づく介入はできない。思い出しますねえ、オウムのほら、波野村の」

瓜生「サティアンなんて冗談じゃない」

稲葉「オウム、オウムオウム」

我孫子「なあんなんだよあんた！」

稲葉「いや、そういえば面白い噂を人から聞いたんですよ」

### ○アパート・川瀬の部屋（夜）

電気が点いておらず暗い六畳一間の殺風景な室内。そこに何をするでもなくただ座っている川瀬を、月明かりが照らしている。

水道からしたたり落ちる水滴の音が川瀬のオウム時代の記憶を呼び起こす。

### ○（回想）コンテナ内

オウムが独房修行に用いていたコンテ

ナの中で、若い川瀬は暗闇に埋もれて蓮華座を組んで瞑想している。コンテナ内は暑いが、その体からは汗も浮かないほど水分が失われており、まさに骨と皮、呼吸は不規則で倒れそう。そこで、川瀬は水滴音を聞く。コンテナの僅かな隙間から溜まった雨水が入り、天井から垂れているその音。川瀬、ふらふらと音を頼りに水の滴る場所を探って、震える手で水を確認すると、口を開けて水滴を受ける。

### ○アパート・川瀬の部屋（夜）

ふと気付けば、川瀬の目の前をヨタヨタとゴキブリが歩いている。川瀬はしばらくそれを眺め、やがて、素早い動きで素手で叩き潰す。

手の平にこびりついた、潰れているがまだ息があり足をピクピクと動かしているゴキブリを、川瀬は見つめる。

それをティッシュに包んで捨てる、  
台所下から取り出した雑巾を絞って、  
手当たり次第に辺りを拭き上げていく。  
続いて床拭きに入ると、床に置いて  
いたスマホに通知が来ていることに  
気がつく。  
スマホ画面には「不在着信…上司（現  
在）」の文字。

## ○県庁所在地・中心街の風景

### ○その一角に位置するファミレス

川瀬が店に入ってくる。

誰かを探して店内を見渡すと、

店員「（来て）いらっしやいませ。一名様  
でしょうか？」

川瀬「いや、先に……」

先に席に座っていた稲葉が川瀬を見て  
手を挙げる。

川瀬「いました、大丈夫です、どうも」

川瀬、稲葉の席に行く。

ステーキを食べている稲葉。

川瀬「あなたが稲葉さん？」

稲葉「どうぞ、座ってください。何か食べます？」

川瀬「（座って）いや、結構です」

稲葉「食べてくださいよ。私だけ食べるのもなんだか気が引ける。どうか私のためだと思って」

しびしび呼び出しボタンを押す川瀬。

川瀬「私向きの仕事があるんですか。野村

課長からそう連絡を受けたんですが」

店員「（来て）お待たせしました」

川瀬、メニューを適当に指さし、

川瀬「これください」

店員「チョコミントパフェが一点でお間違い

ないですか？」

川瀬「はい」

店員「ご注文は以上でよろしいですか」

川瀬「はい」

店員「ありがとうございます」

店員が去って、稲葉、少し笑う。

川瀬「なんですか」

稲葉「いや、イライラしてるのかなと思いますして」

川瀬「そうですか」

稲葉「刑期満了から十年経過後は勤務先に前科を告知する義務はありません。野村課長、辞職を迫ったでしょう。告知義務のない前科を理由にした解雇は不当解雇に当たる可能性があります。それを知ってたんですよ。

川瀬さんの苛立ちは正しい」

川瀬「失礼ですが、あなた何なんです？」

稲葉「有印私文書偽造、建造物不法侵入、逮捕監禁致傷、典型的なオウム犯罪者って感じですね。助かりました、ちょうど経験者を探してまして」

○月読市・沿岸地区

三階建て、150坪ほどの窓のほとん

どない倉庫のような建物が一棟、その周りには一回り小さな同様の構造の建物が二棟あり、もう二棟の建設も進んでいる。ほか、運動場や畑、ビニールハウスや養鶏場も整備されている。建築作業員として忙しなく働いているのは夢見の会の信者たち。この施設群は夢見の会の総本部である。

川瀬（N） 「質問に答えてないですよ」

稲葉（N） 「答えるのは立场上難しい。それでご納得いただけるとは思ってませんがね。ただ、役所の人間しか知らないはずの情報が私に流れてきたんです。その私はあなたの経歴を見込んである閉鎖的な宗教団体の内実を探ってもらいたいと思っている。分かるでしょう？ 覚えてますか、麻原の逮捕後にサティアンを追われたオウムの出家信者たちが移転先で転入届を不受理にされた一連の事件」

○高台災害公営住宅地・アパート

元漁師の住民・剣持浩三（59）がベランダから沿岸地区の工事を眺めている。怒りと諦めの入り交じる表情。他の部屋のベランダにも工事を眺めている住民たちが何人かいる。その一人が手にしたビラに目を落とすと、そこには「ご注意！ 夢見の会は公安監視対象の危険なカルト教団です！」などの文字が書かれている。

川瀬（N）「知りませんよ。その頃こっちは塀の中で呑気に寝てる」

稲葉（N）「ははは。ま、人権問題になりました。だから自治体は自分たちの手では宗教の連中を追い返せない。で、色々と知恵を絞る。使えそうな部外者を探す。そんなところですよ」

○ファミレス

無表情に稲葉を見つめている川瀬。

川瀬「なるほど。そういうことなんですね。

今日はどうもありがとうございます」

席を立とうとする川瀬。

稲葉「川瀬さんだから出来る仕事なんですよ。住民だって困ってる。なんとかお願いできませんか」

川瀬、しばし考えて、

川瀬「オウムでは殺生は御法度でした。少なくともシークレットワークに従事していない私たちが一般サマナにとってはその誰もが自分に課されたワークに手一杯でサテイアンはいつも汚かった。害虫はそこから中にいる。でも誰も殺したりはしない。私は虫が苦手だった。だから睡眠時間を少し削って掃除することにしたんです。そうすれば害虫は発生しない。どうなったと思いますか」

稲葉「どうなったんです？」

川瀬「スパイですよ。Sチェックなんて言うてね。その頃は相互監視の空気があった。

一般的なオウムのサマナなら害虫なんか気にしませんし、掃除をする時間があるなら修行をする。私は公安のスパイだと思われた。ナルコの実験台にされてあの棺桶じみたコンテナで五日間の独房修行だ」

稲葉「辛い思いをされたわけだ。でも、それなら尚更、その呪縛を解くチャンスなんじゃないですか」

川瀬「呪縛なんかないよ。辛くもなかった。それで修行が進むのなら良いことだとさえあの頃は思えた。でも全部無意味だったんだよ。わからないでしょうね」

稲葉「ええ、わかりません。わからないから川瀬さんに頼んでるんです。逆に川瀬さんにもわからないことがあるみたいですよ。あなたは選択の余地があると思ってる。役所が辞職に追い込んでまであなたの素性を隠したがるのは信用問題だからだが、私はそんなものはありません」

沈黙。

稲葉「入会希望者は支部の方で募ってますから、引き受けていただけるとはならぬ」

稲葉、窓の外の雑居ビルを指さす。

### ○夢見の会支部・カウンセリング室

雑居ビル内のネットカフェを居抜きして作られた在家信者や入会希望者のための夢見の会の支部、そのカウンセリング室。

そこで川瀬が問診票を書いている。

「平均睡眠時間は何時間ですか？」の設問に川瀬は「四時間」と書く。

「最近見た夢はどんな内容ですか？」の設問には少し考えて「赤ずきん」と書く。次の「どこで当施設を知りましたか？」の設問で手が止まる。

白衣を着た教団の女性カウンセラー、近江照子（32）が川瀬に声をかける。

近江「書きたくなければ飛ばしてしまってください。単なるアンケートですから」

質問票を近江に渡す川瀬。その際、白衣のネームプレートに近江と書かれて  
いるのを見る。

川瀬「お願いします」

近江はそれに目を通す。

川瀬「宗教なんですよね」

近江「ん？」

川瀬「正直に言いますけど、取引先の人間に  
勧められて来たんです。断るわけにもい  
なかつたんで。でも宗教なら、あまりそ  
ういうのは興味ないんです。正直に言  
いますけど」

近江、微笑んで、

近江「じゃあ私も正直に言います。宗教  
ですよ。私たちは黙睡正教夢見の会と  
言います。隠してなんかいません。そ  
うだなここは、支部つてところですか  
ね。でもそれだとカッコ悪いし入り  
にくいから、ちょっとオシヤレな名  
前にしてるんです。私は反対した  
んですよ？」

川瀬「ああ……」

近江「でも、判断するのは体験してからではダメですか？」

○同・廊下

薄暗い照明。眠気を誘うヒーリングミュージックのBGM。施設内に装飾のたぐいはなく、二畳ほどの睡眠室だけが整然と並んでいる。

○同・睡眠室

川瀬が部屋に入ると、そこにあるのは大きなぬいぐるみの置かれた簡素なベッドとその枕元のパイプ椅子、部屋の角に置かれたアロマキャンドルだけ。川瀬、振り返って近江を見ると、近江はベッドに横になるよう促す。川瀬はベッドに横になって、近江はパイプ椅子に腰掛ける。ぬいぐるみを見る川瀬。

川瀬「あの、これは」

近江、小声で、

近江「抱きしめてください」

川瀬「え？」

近江「ぬいぐるみ」

川瀬「ああ……」

ぬいぐるみを抱きしめる川瀬。

近江「安心するでしょ」

川瀬「うーん……」

目をつむる川瀬。絵本の読み聞かせの  
ように近江は語り出す。

近江「最初は難しいかもしれませんが、でも  
すぐに眠れるようになりますから。その為  
に私があなたを導きます。私はあなた。あ  
なたは私。夢見の会ではね、まだ睡眠のコ  
ントロールが難しい方にティーチャーが付  
くんです。ティーチングを行うことでテイ  
ーチャーとスリーパーはよりよい眠りを目  
指して共に成長するんです。だからもし  
川瀬さんが眠りをコントロールできるよう  
になったら、そしてもし会に入会を希望さ

れるなら、川瀬さんにもいずれにティーチャ―になつてもらいます。ティーチャーの上にはメンターが、メンターの上にはマスターが、そしてマスターの上にはグラウンドマスターが……」

川瀬は目をつむっているが、眠れず、くすくすと笑い出す。

近江「可笑しいですよね」

川瀬「いや、昔のことをちよつと思ひ出した  
だけです」

### ○市民ホール・大会議室

IR誘致の住民説明会が行われており、  
瓜生、我孫子らが列席している。

住民側の出席者の多くは県の中心部に  
住む月読市外の間人だが、会場の最  
後列には剣持の姿も見える。

瓜生「事業者選定につきましては予定通り  
来月末を目処に選定、公表の予定でござい  
ますが、ご質問いただきました選定過程に

つきましては従来通り非公開とさせていた  
だきます。ただ、県ホームページよりダウ  
ンロード可能なサマリーがございますので、  
住民の皆様にはこちらで進捗状況を共有し  
ていただく、そして疑問点などがあればこ  
の場で直接ぶつけていただく、こうした流  
れを作ることと事業者、それから県、それ  
から住民の皆様、これステークホルダーと  
言うべきですけれども、その間のギャップ  
は解消することができかなと、私ども  
としてはそう考えております」

どことなく不満げに瓜生を眺める剣持。  
女性住民「用地の確保は本当にできるん  
ですか。あの方たちには退去していただ  
けるんですか。私それを聞いたんですよ」

## ○夢見の会総本部・ゲート前

突貫工事で完成した夢見の会の総本部  
施設群。

高台公営災害住宅地の住民たちが五十

人ほどその周辺に集まって施設を眺めたり話したりしている。その中には剣持もいる。

住民代表の宮司が信者の一人と交渉中。宮司「ですからね、どうにか代表の方とお話だけでもできないかと思って」

交渉役の信者「はい、あの、そうなんですけど、ちよつと自分の方からですとなんとも……」

信者のほとんどは施設内にいるが、畑とビニールハウスの区画では農作業に従事している信者たちが十人ほどおり、剣持はそれを眺める。

田坂兄弟が門番としてゲート前に立っている、住民の井坂（56・女）が近づいて、

井坂「そこにずっと立ってるの？」

田坂兄「これが仕事ですから」

井坂「ああ……」

その様子をテレビ局のカメラが撮影し

ている。とそこに、ワゴン車数台の隊列が近づいてくるのをカメラが捉える。

### ○夢見の会総本部・メイン棟三階・廊下

ボディーガード役の信者たちを引き連れた望月大道が教主寝室に向かう。ボディーガード役の信者が教主寝室の扉を開けて、望月は中に入る。

### ○同・教主寝室

十畳ほどの室内は中央にパイプベッド、サイドテーブルにアロマキャンドルが置いてあるだけの質素な内装、壁は白い防音壁で病室のようにも見える。マスタークラスの幹部信者たち、男六人と女四人がベッドを囲んでいる。

### 幹部たち「お疲れ様です」

望月は幹部を見回して、ボディーガード役の信者に外で待つよう合図すると、ベッドに腰を降ろす。

望月「ここに来る時に夢を見たよ。夢の中で私はこの部屋とよく似た部屋に一人でいる。何か不安な感じだ。ドアをノックする音がして、外の誰かに声をかけると、その誰かは何かを言った。何を言ったかは覚えていないんだが、そこで私は自分が女性であることに気付く。そして、ドアの向こうの何者かの返答に満足したのか、ドアを開ける。するとそこに立っていたのは狼男だった」

神妙な面持ちで話に聞き入る幹部たち。  
望月「マスター・アルテミス。君ならこれをどう解釈するか」

幹部の一人、アルテミス（28）が話し出す。

アルテミス「インスピレーションでよろしいですか」

望月「もちろん」

アルテミス「グラウンドマスターの夢は私に

瓜子姫の童話を想起させました。グリム童話の赤ずきんと同型の物語です。瓜子、瓜。

私たちに立ち退きを要求した県知事の名前は瓜生です。彼は私たちを騙して食い荒らそうとしている」

重々しく頷く望月。

望月「グループ・アスペクトを開こう」  
幹部たち「はい」

## ○ラーメン屋

川瀬と稲葉がラーメンを食べている。

稲葉「へえ、女性が」

川瀬「男信者に対しては女信者、女信者に対しては男信者がティーチャー役で付く。  
睡眠の導入と見守り、それから起きた後の夢の内容の聞き取りがティーチャーの仕事らしい。聞き取りは個人の睡眠の質を高めるとためでもあるが個別の夢を通して人類の普遍的無意識にアクセスすることが目的と聞いた。ユング心理学をベースにした教義でしようね」

稲葉「聞いているだけで眠くなる話ですなえ。」

入ろうかな。歳のせいかな私眠りが浅いんですよ」

川瀬「じゃそうしてください」

稲葉「冗談です。いつ頃出家の話を持ち出せますか。できるだけ早く例の施設の方に入ってもらいたいんですよ。あそこの連中は自給自足で外の世界に出てこない。中で何が行われてるかのネタが欲しいんですが」

川瀬「いつでも。お望みなら明日からでも」

稲葉「怪しまれませんか。出家には全財産の教団への寄付が必要でしょう。本当に入りたい人でもそんな決断すぐできるかな」

川瀬「そんな決断だからすぐにでもする。財産の寄進は教団のためにするんじゃないんです。退路を塞いで自分の信じる道突き進むために財産を預ける。向こうがどうあれそれが信者の心理だし、それは教団側もよくわかってる」

ラーメンからネギを抜く川瀬。

川瀬「信者はよりよい睡眠のためにあの海辺

のサティアンに入る。睡眠を妨げるスマホやパソコンは中に持っていけないから連絡は少し待ってください」

稲葉「食わず嫌いは良くないですよー」

川瀬「消化に悪い。睡眠に支障を来すものは避けてるんです。それに出家とは言わない。離合と呼んでる」

顔をしかめる稲葉。

稲葉「本気でハマってないですよね？」

川瀬「そっちの方が都合がいいんじゃないのか」

○夢見の会支部・睡眠室

寝ていた川瀬が目を覚ます。座って

川瀬を見守っていた近江が気付いて、

近江「夢は見ましたか」

川瀬「はい」

近江「リーディングをしましょう。頭に思い浮かぶままに夢の内容を言ってみて」

川瀬「男、ラーメン、ネギ、悪いモノ」

近江は単語を基に手にしたカルテに絵を描いていく。

近江「怖かった？」

川瀬「怖くない。橋、川、汚れた川、壊れたボート、渡る、橋を渡る。男がいる」

近江「どんな男？」

川瀬「男は……」

沈黙。

近江「続けて」

川瀬「ティーチャー。離合したいです」

○夢見の会総本部・メイン棟・食堂

広報部長で教団幹部のアルテミスが

ニュース番組の取材クルーに施設内を案内している。

アルテミス「こちら食堂です」

リポーター「あ、結構広いんですねー」

アルテミス「そうですね。大体……二百人くらいは今こちらで生活していますので」

## ○同・厨房

取材クルーのカメラが調理風景を撮っている。

リポーター「あ、美味しそうな香りが」

アルテミス「（笑）ありがとうございます。

やっぱりお食事って生活の大事な一部なので、睡眠を妨げる刺激物は避けつつ、でも栄養クオリティは落とさないで、まあ、見て楽しい食べて美味しい、そういうものがスリーパーさんたちに提供できればなと思ってます。こちら完成品」

スープや魚を中心としたフランス料理のようなお膳を見せるアルテミス。

リポーター「うわあ」

## ○夢見の会総本部・運動場

テニスやサッカーをしているジャージ姿の信者たち。それを撮る取材クルー。

リポーター「なんか、学校みたいですよね」  
アルテミス「そうですね。適度な運動も質の

良い睡眠には不可欠かと思えますので……  
あでも勉強は学校ほどうしないですよ。ユン  
グ先生の心理学と、後はスリーパーさんの  
適性に応じた職業訓練ぐらいかな……」  
リポーター「楽しそう」

○我孫子の家・居間

スウェット姿の我孫子がニュース番組  
内で放送されている施設内の映像を見  
ながら電話に怒鳴っている。

台所には料理をしている妻がいる。

我孫子「楽しそう、じゃないんだよ！ これ  
じゃあ逆効果でしょ！ 何のためにあなた  
たちをお願いしたと思ってるの！ 宗教な  
の！？ あなたたち宗教の味方！？ オウ  
ムなんですか！？」  
妻の声「ねえ！ うるさいんだけど」  
小さくなる我孫子。

○在京テレビ局・報道フロア・喫煙所

ニュース番組のディレクター・梅津

(37) がタバコを吸いながらうんざりした表情で電話越しの我孫子の罵声を聞き流している。

梅津 「ちゃんとクルーは出したじゃないですか。二回もですよ。瓜生さんの頼みって言うから引き受けたけれども、ぶっちゃけ我孫子さんには借りはないでわけですから。内容に口を出すんならご自身で素材録りに行ったらどうです。こっちだってボランテイアじゃないんだから」

我孫子の声 「貴様、何様だ！」

梅津 「これが報道の自由です。これが報道の自由です」

若い部下が小走りにやってきて、ジェスチャーで梅津にこっちへ来るよう伝える。

○同・オフィス

パソコンでユーチューブの動画を見て

いる梅津と部下。

その動画は望月が総本部に到着した際の様子をニュース番組のクルーが捉え、番組内で放送された映像と、施設前に集まった人々の一人が住民たちから少し離れてスマホで同じ場面を撮影した映像を比較したもの。

番組で放送された映像では望月がワゴンから下りてきた瞬間に住民の一人が発した「帰れ」の言葉が増幅され、至近距離で住民たちを撮ることで騒然としているように見えるが、スマホの映像では現場にとくに混乱もなく、「帰れ」と言った住民が泥酔した中年男性であることがわかる。

再生数は十万超え。コメント欄はテレビ局を非難する声で溢れている。

梅津 「マジかよ」

部下 「もうツイッターにも飛び火してます」

梅津 「マジかよ」

スマホでツイッターを見ようとする  
梅津。

そこに編成局長がやってきて、  
編成局長「君たち、なんかした？」

編成局長の顔を見て固まる二人。

### ○県庁・記者会見場

詰めかけた報道陣が写真を撮ったりメモを取ったりしながら壇上を見ている。壇上には演台の代わりに一人用のテーブルとパイプ椅子が向かい合わせに二つ、その一つに望月が座っていて静かに瞑想中。

職員の先導で瓜生が部屋に入ってきて、空いた方の椅子に座る。瓜生は望月をじっと見つめるが、望月はまだ瞑想を続けている。

瓜生「（咳払い）お待たせしました」

ゆっくりと目を開けて瓜生を見つめる望月。二人の視線が沈黙のうちに交差

して、それから望月、報道陣の方を見て破顔一笑。

望月「宗教家らしい絵が皆さん欲しいかなと思ひまして。すいません、そういうのはいらなかったですね。もう、ちよつと舞い上がっちゃつて、私あんまりこういう場には出たことがないものですから……どうも皆様初めまして、黙睡正教夢見の会代表・望月大道と申します」

報道陣にペコリと頭を下げる望月。

それから瓜生に向き直つて、

望月「瓜生知事も、どうも初めまして……ですかね？ いやあの、こういう場で言うのもなんですが、よく見てました、知事が俳優をされていた頃のドラマ」

瓜生「猿芝居は結構。単刀直入に申し上げますが、教団施設を県外に移転して頂きたい。それが県民の総意です」

虚を突かれたような表情の望月。

瓜生「私たちはぜひとも月読市にIRをと血

の滲む思いでこの数年というものの努力を重ねてきた。無論あなたたちに妨害の意図があるとは思っていない。しかし現実には県民の思いを踏みにじってる。ですから県外移転をお願いしてる」

望月「やっぱり、私の芝居はプロの目から見ても下手ですか」

瓜生「芝居の話などしていかない。はいかいいえで答えて欲しい」

望月「回答は既に書面で出したはずですよ。まさかそれがこの場で覆るのも思っていないでしょう」

瓜生「はいかいいえで答えて欲しい」

望月「いいえと言ったらどうなるんです？交渉決裂であなたがここから出て行くんですか？」

瓜生「はいかいいえで答えられないなら会談は打ち切ります」

望月「そうはなりませんね、先にここを出てしまえばパフォーマンスは失敗だ。沢山の

カメラ、沢山のマイク、沢山の目、沢山の耳、沢山の手、その全てが今わたしたち二人の一挙手一投足を記録してる。あなたはアピールしないといけない」

瓜生「はいかいいえで」

望月「県民たちはその姿を見て少しは安心するかもしれない。しかしその向こう側にあなたにとってもっと大事な別のものが私には見える。IR事業者だ。彼らが手を引かないように建設予定地を強奪した悪のカルト宗教と戦っているそぶりを見せないといけない。事業者選定期限はもう間近です。選定作業が中断すればIR計画は暗礁に乗り上げる、IRが暗礁に乗り上げればあなたが次の知事選で再選する見込みもなくなる。最近寝てないでしょう、声にいつものハリがない」

瓜生はすこし考えて、

瓜生「どうして月読市を選んだ」

望月「私たちは夢を通して人間が認識できな

い無意識の願望を把握する。よりよい眠りを求める我々のスリーパーたちがこの地を夢に見たんです。それも一人や二人ではありません。ここしかない」

瓜生「身勝手だな。自分たちとまるで関係のない町を、人々を巻き込んで」

キョトンとする望月。

望月「私たちはツクヨミ神を信仰してる」

## ○山道

鬱蒼とした森の中に伸びる寂れた山道を稲葉が電話しながら一人歩いている。稲葉「そう、そんな怒ってたの。通知切ってたから気付かなかったよ。そりゃ当面切ったままの方がいいな」

## ○レンタルオフィス・個室

岐部がPC作業を中断して稲葉と電話している。PCディスプレイに映っているのは複数のツイッターアカウント。

彼はそれを使ってテレビ局を炎上させている。

岐部「なんでタレント知事ってああなんですかね。こっちはお望み通りあの何も無い糞田舎をPRしてやっただけなのに」

○山道

笑う稲葉。

稲葉「夜道に街灯をつければ虫ぐらい寄ってくるに決まってるのになあ。甘い汁だけ吸えるところでも思ってるのかな」

蜂が稲葉の前を飛んで、稲葉はそれを追い払おうと悪戦苦闘。

○レンタルオフィス・個室

岐部「稲葉さん今どこなんすか」

○山道

なんとか蜂を追い払って、

稲葉「今？ いま山口県。夢見の会の前身の

宗教団体がまだ残ってるらしいから。あ、それ知事と腰巾着に言っといてよ。こっちはこっちで動いてますって」

女の声「そこにいるのは誰だ！」

稲葉「うわ！」

驚いてバランスを崩し、仰向けに倒れる稲葉。声の方を見ると、山道の上の方に農作業用の格好をした北原みち子（70）が立っているのが見える。

みち子「眠りにきたか。おー危な。ずっと

寝たままになるところだったね」

豪快に笑うみち子。

### ○眠り寺・境内

本堂に明かりが灯っていないければ傍目には廃寺に見えるほどくたびれた境内。

みち子、稲葉を案内しながら本堂に向かう。

みち子「あれが眠り舎ね。あんた寝てない顔してるけど、寝てくか？」

窓の割れた箇所を段ボールで塞いだボロボロのプレハブが稲葉の目に入る。

稲葉「眠れますかね……」

みち子「どうだろねー。最近は眠りに来る人もいないからねー。でもこのあいだ母ちゃんがクマ寝てたって言ってたよ」

豪快に笑うみち子。

○同・本堂

みち子と稲葉が入ってくる。

みち子「母ちゃん。お客さん。母ちゃん！」

本尊の前に座して眠っていた臨睡宗  
教主・北原さち（93）がゆっくり  
振り返る。

みち子「寝てたか」

さち「お眠りさん来たけえ、寝てたわ」

× × ×

さちが稲葉に教団の歴史を語っている。  
訛りがきついためその言葉を傍らに座  
ったみち子が逐次翻訳している。

さち（みち子）「戦前は今のようにな宗教は自由にしてはいけなかった。どこに行っても特高警察の目がある。お父さんもお母さんも逮捕されて何日も眠れなかった。私たちは平和な宗教だと言ったけれども許してくれなかった。眠りを勧めることはお国に背くことだ。そう言われた」

稲葉「夢をツクヨミの啓示だとする異端的なツクヨミ信仰が国家神道に反するとして解散を余儀なくされた。それで、戦後になって教団名を臨睡宗月読から現在の臨睡宗へと変えて活動を再開すると、ユング派心理学者の望月博士と出会ったと思うんですが」

さち「んー？」

みち子「望月博士。望月博士のことが聞きたいって」

さち（みち子）「望月先生のこととはよく知らない。ある日突然やってきて実験のようなことをした。先生はツクヨミ神を隠れた

秋田犬だと言って大層喜んでいた」

稲葉「秋田いぬ？」

みち子「（さちに）秋田犬？」

さち「秋田犬」

稲葉「ひよつとして、アーキタイプですか

ね？」

さち「そうかもしれん。わからん」

### ○同・物置き場

棺を開けるみち子。稲葉がのぞき込むと、中に即身仏が入っている。

みち子「これ、黙睡上人ね」

稲葉「はあ」

みち子「触ってみる？」

稲葉「あいや、大丈夫です……しかし、ツクヨミを信仰しているのにはここはお寺なんです。即身仏まで」

みち子「そうよ。だって夢に神道も仏教もキリスト教もないもの。みんな夢の中では同じなんだわ」

さちの声「三年寝太郎」

みち子「あだ名。僧侶のくせしてグースカ

グースカ寝てばかりいたからこの人のこと

そう呼んでんの」

稲葉「それはまた不名誉なあだ名ですねえ」

みち子「そうかね？」

さちの声「何年寝たろう。起きろ」

みち子「この世の終わりに目を覚まして衆生

を救済するって信じてるんだわ。弥勒菩薩

だね」

即身仏の顔を見つめる稲葉。

## ○山道

山道を下るみち子と稲葉。

稲葉「望月先生の息子が黙睡正教夢見の会と

いう新興宗教団体を率いていることはご存

じですか」

みち子「そりゃもちろん。たまに教団の人が

挨拶に来て寝て帰りますよ。ハク付けに即

身仏讓って欲しいんだらうね」

稲葉「どう思われます。私にはあなたたちの大事に守ってきた教団が外から入ってきた望月家に奪われたように映るんですが」

みち子「あんた週刊誌のライター？」

稲葉「ではありませんが、考えようによつてはもつとタチが悪いかもしれませぬ」

豪快に笑うみち子。

みち子「どうも思いやせん。向こうは向こう、こっちはこっちだ。大切なのはよく眠ること、どこで寝たって同じなのよ。ツクヨミ神は夢の中にいるからね」

## ○農道

どこまでも続くかのような農道を一人で歩いている稲葉。遠くの雷鳴に空を見上げると、今にも一降りきそうなどんよりした空色。

立ち止まって、左右の田畑や点在する民家を見渡す稲葉。辺りは静まりかえって人氣はまったくない。

何かを直感したのか、恐る恐る後ろを振り返ると、百メートルほど離れた所に赤い服を着た胴のねじ曲がった女が後ろ向きに立っているのが見える。稲葉、心拍数が上がって、呼吸が乱れる。女の背中に目が釘付けになったまま、叫ぼうとして震える口を開こうとすると、女はゆっくりと身体を回転させて稲葉の方を向こうとする……。

○夢見の会総本部・宿舎・川瀬の部屋（朝）

支部と同じ間取りの睡眠室。寝ていた川瀬が悪夢にうなされ飛び起きる。傍らに座っていたティーチャー役の女性信者・櫛田（43）がびっくりした顔で川瀬を見る。

櫛田 「ごめんなさい……びっくりして」

川瀬 「こちらこそ失礼しました……」

櫛田 「夢は覚えていますか？」

川瀬 「夢？」

櫛田「今日は調子が悪いですかね。大丈夫ですよ。すっかり眠れるように一緒に頑張りましょう。まずは一日六時間」

川瀬「はい」

○夢見の会総本部・運動場（朝）

ラジオ体操をしている信者たちと川瀬。柵の外には高台公営災害住宅地住民も数十人ほど来ており、折り畳み椅子やビールなどを持ち込んでさながらスポーツ観戦でもするように和気あいあいと施設や信者たちを眺めている。住民の一人として来ていた宮司が体操をしている小国に声を掛ける。

宮司「小国さん。そっちの暮らしはどう？」

小国、チラと宮司を見て、

小国「気になるならあんたも入れ」

井坂と門番の田坂兄弟は少し打ち解けた様子で世間話をしている。

井坂「あそう。じゃ眠れないね」

田坂兄「まあでも慣れですね」

井坂「うちの息子もさあ、コンビニ夜勤やっ  
てるけどさあ、あれ大変だよな」

剣持だけは誰とも話さず無表情に信者  
たちを見ている。

櫛田N「昨日までのドリームリーディングの  
結果はメンター会議で解釈しました。それ  
で、夢から判断した配属部署なんです  
が、施設管理部に行っていただけ  
ますか？」

川瀬N「そこで、自分は何をする  
んです？」

○夢見の会総本部・メイン棟・食堂（朝）

ヒーリングミュージックが流れる中、  
ほとんど話さずに黙々と朝食をと  
っている信者たち。川瀬も信者  
たちを観察しながら食事をして  
いる。

櫛田N「詳しくは配属先でという  
ことになるかと思いますが、私が  
聞いた限りでは清掃班とか……」

川瀬N「清掃班ですか」

櫛田 N 「嫌ですかね、やっぱり」

川瀬 N 「いえ、自分にはよく合ってます」

○夢見の会総本部・メイン棟・教室 A (朝)

川瀬と信者たちが教育部長マスター・プロメテウス(33)のユング心理学講義を受けている。

黒板には個人個人の無意識が一つの大きな集合的無意識と矢印で紐付けられた関係図と、各種アーキタイプの中にツクヨミのアーキタイプが置かれた関係図が書かれ、その二つが等号で結ばれている。

プロメテウス「これを哲学者のライプニッツが提唱したいわゆるモナドとのアナロジーで捉えることもできる。つまり、個人の無意識は集合的無意識の断片を反映したものである。こうした関係性はユングの分類した諸アーキタイプ、グレートマザーやオールドワイズマンなどと我々の発見したツク

ヨミ神のアーキタイプにも見られる」

川瀬 N 「榎田さんはどこの部署なんですか」

榎田 N 「それはどうでもいいことだな」

川瀬 N 「ですかね」

榎田 N 「うそうそ、知りたかったら教えてあげるけど、でもね、夢見の会ではあんまり人間関係を作らないようにしてるわけね。そういうのって睡眠の妨げになるのよ。恋愛も御法度。好きになっちゃダメよ？」

## ○市民ホール・大ホール

望月の講演会。客入りは満席に近い。

舞台袖には幹部信者たちが控えている。

望月 「ですからたとえば排泄、これは一日多くて一時間ぐらいと見積りましょう。食事は一回三十分が三食で一時間半。このように考えますと睡眠は、ま人によって多い少ないはあるでしょうけれども、平均して六時間から七時間ですから、人間の生活の中で非常に大きなウェイトを占めるわけで

す。ですが、それにも関わらず日本人の睡眠への関心は先進国の中では最低という統計も出ておりまして、そうした中で日本人の睡眠の質、ひいては生活の質を上げるにはどうしたらいいか、こうした問題意識から私たちは活動を始めたわけです。まあ偉そうに言ってますが要はもっとグータラしよう」と

会場から笑い声。

### ○夢見の会総本部・メイン棟・外

食事と講義を終えた信者たちが各々の配属先に向かっていく。管理棟に向かって歩く川瀬は途中、何人かの信者がワゴンから工作機械のロボットアームを降ろしているのを目に留める。

男の声「川瀬さん？」

声に振り返ると、そこには信者の橋本

良秀（34）がいる。

橋本「川瀬さんだ……」

川瀬「失礼ですけど、どちら様？」

橋本「橋本。橋本良秀。上九ではよくお世話になりました」

川瀬の目に動揺の色が浮かぶ。

○夢見の会総本部・管理棟・トイレ

男子トイレを掃除している作業着の

橋本と川瀬。

橋本「まさかこんなところで再会できるなんて思わなかったなあ」

川瀬「ええ、私もです」

橋本「敬語なんてやめてくださいよ！ 僕にとつては川瀬さんがオウム小学校の先生

なんですから！ 恩師ですよ！」

川瀬「橋本くん、ご両親はどうしてる？」

橋本「いやあそんなのあれですよ、もう縁切ってますよ。洗脳抜けなかったんですよ。今もなんか、知りませんがどっかの後継団体に籍置いてるらしいですよ。これ風の噂ですけどね」

川瀬「そっか」

○同・廊下

橋本の施設案内を受けながら掃除機を掛けている川瀬。

橋本「いやあでも、すごい偶然だなあ。配属部署まで同じなんだもんなあ。星の巡り合わせかな。ツクヨミ神のお導きだ」

扉の閉められた会議室の前を通りかかる。中ではメンター会議中。

橋本「（小声）あ、ここ会議室です。川瀬さんも夢見るでしょ？ それをああやってメンターが解釈して無意識の抱える願望とか、ストレスとか、安眠の邪魔になるものを汲み取ってるんすよ。って知ってるか！」

居心地の悪そうな表情の川瀬。

○夢見の会支部・廊下

アルテミスら数人の幹部を連れた望月

が視察に来ており、廊下を歩くと睡眠室から顔を出した信者たちが次々と頭を下げる。

望月、困ったように笑って、

望月「いい、いい。いつも通りでいいよ。いつも通りでいいから。どんな感じか見に来ただけなんだから」

カウンセリング室から出てきた近江が望月に会釈すると、望月は近江から視線を逸らして、近くの睡眠室の男性信者に小声で話しかける。男性信者の声は小さくて聞き取れない。

望月「どうですか。みなさんちゃんと眠れていますか？ その人は？ 体験入会の人？ いいですよ、臨時ティーチャーだ。せっかくだからね」

睡眠室に入る望月。男性信者は部屋の外に出て頭を下げる。

その光景を無表情に眺めている近江。

東の間、アルテミスと目が合う。

○夢見の会総本部・宿舎

ズラリと並んだ睡眠室のゴミを回収してベッドメイキングをしていく二人。フロアには他に人は見当たらない。

橋本「川瀬さん、もうかなり眠れるようになりました？ 僕はガキだったから幸いにして呑気にやってましたけど、オウムの出家信者って一日四時間睡眠とかだったでしょ。なんか、脱会信者に聞いたらそれで慣れちゃってるからなかなかちゃんとした睡眠が取れないって言ってて、それで僕も夢見の会のこと知ったんですけど」

川瀬「橋本くんさ。なんでこんなところにいるの？」

橋本「それってどういう？」

川瀬「もう宗教とかコリゴリなんじゃないか  
と思っ」

橋本「あー」

川瀬「俺は自分の意志でここに来たけど、も

し誰かに言われて来たとかなら、気を使う必要なんてないんじゃないかな」

橋本「誰かって？」

川瀬「……オウム時代の仲間とかさ」

橋本、作業の手を止めて、

橋本「仲間なんていないですよ！ あんな

クソ連中クソですから！ 川瀬さんぐらいですよクソオウムの中で信頼できるの！」

川瀬「……あんまり、大きな声でその名前出さないで。他の人に知られたら恥ずかしいからさ」

橋本「すいません」

川瀬「そんなことより、さっさとこのクソ仕事を終わらせちゃおう」

洗濯済みのベッドシートをベッドの上に広げる川瀬。

## ○市民ホール・大会議室

IR住民説明会が紛糾している。瓜生は眉間に皺を寄せ、目をつむって黙っ

ている。

住民1 「あんた何も約束果たせてないじゃないかよ！ 教団退去の話はどうなった！」

住民2 「そうだよ！」

我孫子 「静かにしてください！ 静かにしてください！」

住民3 「そもそもIRだって本当に私たちのためになるかわからないじゃないですか」

住民1 「説明が足りないよ！」

住民2 「そうだそうだ！」

我孫子 「一人ずつ！ 一人ずつ！」

住民4 「あんたも自分の口でなんか言えよ！ 市長だろ！」

我孫子、感情に任せて反論しようとするものの、言葉をぐっと飲み込む。

住民3が話し出すと他の住民は静かになる。

住民3 「あのね、私調べたんですよ。知事は選挙の時にIR地域振興の事例としてマカオやシンガポールを挙げましたけど、人口

減の進むアメリカのニュージャージー州は I R 開発に多額の資金を投入して、それにも関わらず国内の他のカジノ I R との競争に負けて、I R 施設の閉鎖が相次いでいるじゃないですか！」

住民たちが拍手する。

住民 3 「どうしてその事実を隠していたんですか！ それを知っていたら知事に投票しなかったですよ！ こんな詐欺みたいなものじゃないですか！」

瓜生、目を開けて話し出す。

瓜生 「あなたがその事実を調べることができたのならそれは調べさえすれば誰でも分かる公開情報だということです。公開情報ならあえて私が提示する意味はありません」

住民たちの反発の野次。

瓜生は声量を一段上げて、方言に。

瓜生 「（方言）公開されているどの情報にどんな価値があるか判断するのは容易なことではない。震災復興で住民の皆様が迷い続

けたのはどの情報にどれだけの価値があるか判断できなかったからだ。だから私は情報を精査して価値ある情報を提示した。住民の皆様がこれ以上迷わないように判断を代わりにした。それが知事の責務です」

男の声「（方言）そんなもん詭弁じゃないの」

野球帽にサングラス、マスクという怪しい変装をして住民に紛れていた元県知事・猿田孝彦（68）が変装を解きながら立ち上がると、会場に来ていた報道陣が一斉にカメラを向ける。

猿田「みんなと一緒にものを見て、みんなと一緒に考えて、みんなと一緒に解決する。これが知事っちゅーもんで、あんたがやってることは独裁者じゃないの！」

住民たちから拍手と声援。

瓜生「これは住民説明会です。宣伝をするために来たのならお帰りいただけませんか」

猿田「あんたはね、そうやって人を悪いよう

にしか見ないんだよ！ 人情ってものがないじゃない！ みんなの顔だって見てないよ！ わたしく猿田孝彦、あんたが知事選で嫌になるほどよく顔を見たはずの前県知事がよ、こうやってこんな怪しい変装をしてここにずっと座ってたらだよ、そこからみんなの顔をちゃーんと見てたら気付くでしょうが！ なんで気付かなかった！ 住民の顔を見てないからじゃない！ 瓜生さん、あんた知事失格だよ！」

住民たちの拍手喝采。報道陣も盛り上がる。

### ○夢見の会総本部・ゲート前

へ断固反対！の鉢巻きをして拡声器を手にした猿田を先頭にした、市外住民たちの抗議デモ隊がシュプレヒコールを上げている。

猿田「住民の意思を無視するカルトは月読市から出て行けー！」

デモ隊「出て行けー！」

高台公営災害住宅地住民たちはデモ隊の様子を呆れ気味に眺めている。

通用口から掃除用具のカートを持った川瀬と橋本が出てきて、他の棟から少し離れたところにある工作棟へ向かう。二人はデモ隊を相手にしない。

橋本「（小声）なんか、懐かしいっすね」

川瀬「そんなことないよ」

○県庁・知事室

瓜生、我孫子、雨野が会談中。瓜生は雨野の持ってきた資料をテーブルに叩きつけて、我孫子を睨む。

瓜生「なんで猿田が戻ってきた！　なぜ俺に言わない！　あなたは今まで何をしていたんだよ！」

黙って俯く我孫子。瓜生は今度は雨野を睨みつける。

瓜生「雨野さんも何をやってるんですか？

公安なら公安らしい仕事をして下さいよ。  
じゃなかったら誰が住民を守るんです」

しぶしぶ頷く雨野。

雨野「仰せのままに」

○夢見の会総本部・工作棟・廊下く実験室

他の棟とは異なり廊下には金属ゴミや  
資材やダンボールなどが置かれ、雑然  
としている。

川瀬がそこに掃除機をかけていると  
前の部屋から小走りに信者の男が出て  
きて、扉を半開きにしたまま廊下の奥  
へと去って行く。

何気なく中を覗き込む川瀬。部屋の中  
には奇妙に揺らめく凶像を映し出す  
モニターと、そのモニターから伸びた  
ケーブルの接続されたヘッドギアのよ  
うな装置を身につけ、ベッドで眠って  
いる信者が見える。

モニターの凶像を眺める川瀬。その

図像は次第にオレンジ色を帯び、キノコ雲に見える形に変形していく。

橋本の声「川瀬さん」

川瀬「うわ！」

少し笑う橋本。

橋本「なんですか、どうしたんですか。自分そんな驚くことしました？」

川瀬「警察でも入ってきたのかと思ったよ」

橋本「経験者は語る？ 心配しなくてもここは平和ですよ。ここなら眠れる」

### ○夢見の会支部・睡眠室

近江、男性信者の夢を基に描いた絵を信者に見せながら夢の解釈をしている。

近江「セッションはあくまで共同作業なんです。すね。あなたは私。私はあなた。ティーチャーが一方的に夢を解釈するんじゃないくて、ティーチャーとスリーパーと一緒に解釈を作り上げて気付きを得ることが大事なんです。じゃあ、一緒に解釈していきましょう。」

これを見てどんな風に思う？」

男性信者「ナルト……ラーメンのナルトの渦巻きが印象的です」

近江「渦巻き、泥沼、蟻地獄。渦巻きの標準解釈はグレートマザーで古いものの終わり、と新しいものの始まりですが、あなたはこれを見てどう感じる？」

と、外が騒がしくなる。

### ○同・廊下

警官たちが次々と在家信者や体験入会の人々を連行していく。

近江が睡眠室から出てきて、現場の指揮を執る刑事に詰め寄る。

近江「ご用件はなんですか」

刑事「あなた、近江さん？　ここの責任者の近江照子さん？」

### ○夢見の会総本部・メイン棟・食堂（夜）

夕食をとっている川瀬と橋本。

デモ隊のシュプレヒコールがここまで聞こえてくる。

橋本「なんか、夢を映像化するんですって。

リーディングの精度をもっと上げて無意識にダイレクトにアクセスするためにあの機械作ってるらしいですよ。噂ですけど」

川瀬「アクセスしてどうなるの」

橋本「それは……自分の無意識も、集合的無意識も、世界の未来も知ることができる」  
川瀬「あんまり知りたくないな。怖い夢ばかり見るから」

橋本、嬉しそうに、

橋本「僕もです。僕も」

何か考え込む川瀬。

○夢見の会支部・睡眠室（夜）

近江が一人でベッドに座っていると、そこにファイルを手にした雨野が入ってくる。

雨野「すいませんね、お待たせしちゃって」

無表情に雨野を見つめる近江。雨野は椅子に座ってファイルを読み始める。

雨野「勘弁してくださいよ。警察も市民の通報を受けたら動かないといけない」

近江「なんの通報ですか」

雨野「風営法違反かなあ。ここで性的サービスを提供しているとか。強制わいせつっていうのもありますねえ。寝ている女性の胸を男性信者が触ったりしたとか」

近江「やってません」

雨野「ああそうですか。じゃ嫌がらせの通報かな。酷いですよね、見慣れない宗教ってだけで人はいくらでも残酷になれる。でも意外だったな、近江さんってほら、前は教団の生活指導部長だったでしょ。立派な教団幹部の一人だ。それがどうして支部勤務に回されてマスターの称号も剥奪されたんだろう。今メンターでしたっけ？ マスター時代のドリームスペルは？ えーと、ああ、あった、マスター・ヒュプノスね」

近江「公安の方ですか」

雨野「そう恐い顔をしないで欲しいな。私は政治家連中と違ってあなたたちにここを出て行って欲しいとは思ってないんですよ。むしろ居て欲しいと思ってる。仕事のない公安はこんな地方じゃ肩身が狭い。ことに私みたいなノンキヤリはね」

雨野、身を乗り出して、

雨野「だから、取引しましょう。誰か一人マスタークラスの人間を出して欲しい。もちろんもちろん、起訴するつもりはありません。送致まで持って行くだけ。まあなにせこの日本社会ってというのは書類送検が有罪判決と同じ価値を持ってますからねえ。それで政治家連中は溜飲を下げるし、私の顔も立つし、ま、あなた方はしばらく肩身の狭い思いをするでしょうが、晴れて不起訴が決まれば一転して警察の杜撰な捜査と差別的なマスコミ報道の犠牲者だ。みんな自分を加害者だと思いたくないから、一度犠

「犠牲になればもう手は出されません」

○夢見の会総本部・宿舎・川瀬の部屋（夜）

穏やかな表情で眠っている川瀬。櫛田は睡眠の様子をノートにメモしている。突然、外から大音量の軍歌が聞こえてきて、川瀬は目を覚ます。何が起こったか分からず顔を見合わせる二人。

○同・メイン棟・三階廊下（夜）

軍歌がずっと鳴り響いている。

田坂兄弟が階段前で話している。

田坂弟「いや連絡はしたけど、管理部の方もどうにもできないって」

田坂兄「管理部にどうにもできないことをグラントマスターに持ち込めないだろ。

マスター・ヘルメスは？」

と、教主寢室の扉が開いて、中からアルテミスが出てくる。アルテミスは田坂兄弟を見て一瞬ぎよつとした表情

を浮かべるが、すぐに平静を取り戻して二人に近づく。

アルテミス「何があったの？」

○夢見の会総本部・ゲート前（夜）

ゲート前に停車している右翼の街宣車が軍歌を流している。

○街宣車の車内（夜）

運転席の右翼の中年男と助手席にいる青山が話している。

右翼の男「『メイドインアビス』って面白い？」

青山「面白いっていうか、鬱とかそういう系ですかね」

右翼の男「結構グロい？」

青山「あー、グロいっすね」

右翼の男「あー、じゃダメだ。俺グロいの見られないんだよね」

青山「牛に引かれて善光寺」

右翼の男「え？」

○夢見の会総本部・宿舎・廊下（夜）

睡眠室から出てきた信者たちが不安そうにしている。川瀬はそれを掻き分けて宿舎の外へと向かう。櫛田が後ろから呼びかける。

櫛田「川瀬さん！ 部屋に！」

川瀬「ちよっと様子見に行くだけです」

○高台公営住宅地・アパート（夜）

軍歌はここまで響いており、剣持ほかの起きた住民たちがベランダから夢見の会の総本部を眺めている。

○夢見の会総本部・宿舎の外（夜）

川瀬が宿舎から出てくると、何人かの警備担当の信者たちが何をしてもなく街宣車を眺めているのが見える。

川瀬は信者たちに近づいて、

川瀬「警察は呼んだんですか」

警備信者1「一応通報はしたんですけど」

警備信者2「来ないですよ。具体的な被害が出たらまた電話しろって」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる川瀬。と、管理棟からモップを手にした橋本が出てくるのが見える。ゲートに向かう橋本に川瀬は追いついて、

川瀬「なにやってるの。戻りなよ」

橋本「あ、川瀬さん。どうも」

川瀬「戻れって」

橋本「どこに戻るんですか。戻れないですよ。戻っても眠れないし」

川瀬、橋本の手を取って引き留める。

川瀬「いいから」

川瀬を見つめる橋本。川瀬は一人で敷地の外へ出て行く。

### ○同・ゲート前（夜）

通用口から出てきた川瀬が街宣車に近

づいて運転席のウィンドウをノック。  
しかし運転席の右翼の中年男は無視を  
決め込む。

もう一度ノックをするが変化はなく、  
返答代わりに軍歌の音量が上がる。

川瀬、敷地内に戻ろうとして一旦街宣  
車に背を向け、しばし考え込む。

それから、川瀬はゲートの前で街宣車  
の方を向いて蓮華座を組んで、瞑想を  
始める。

川瀬の世界から音が消えていく。

その代わりに聞こえてくるのはかつて  
オウムの独房修行中に聞いた水滴の音。

○同（日替わり）

猿田たちが川瀬の目の前で激しい抗議  
デモをしているが彼は微動だにしない。

○同（日替わり）

榎田が朝食のお膳を持ってやってきて

川瀬の肩を揺するが、川瀬は動かない。

○同（日替わり）

高台公営住宅地の人々が川瀬を見物してスマホで撮ったりしている。剣持が川瀬を眺めていると、川瀬は倒れて意識を失う。

○病院

ベッドの上で目を覚ます川瀬。

水滴の音（これは幻聴）のする方を見ると、そこに点滴袋があり、自分が点滴を受けていることに気付く

稲葉の声「即身仏にでもなるつもりかと思いましたがよ」

声の方を見ると、ベッド脇に稲葉が座っている。

川瀬「どれぐらいですか？」

急な発声で咳き込む川瀬。

稲葉「五日って聞きました。無茶なことはや

めて欲しいなあ。あなたはそこで寝てるだけでも、こっちは色々大変だったんですよ。私だってそうやってゆっくり眠りたいもんですよ」

川瀬「ちようどよかったでしょう」

稲葉「なんかネタ掴めました？」

川瀬、少し考えて、

川瀬「終末論の教義がある」

稲葉「それは初めて聞いたな」

川瀬「直感ですよ。信者の話を聞いていて分かった。夢の中に死の予兆を読み取る。

セッションを通して暗に死の恐怖を煽って離合させる。個人の夢に表れた死の予兆を集合的無意識の死の予兆として……人類の滅亡の予言として解釈する」

稲葉「みなさんそう信じてるんですか」

川瀬「いや、おそらくは知らない。でも夢を正確に読み取る装置の研究班がいる。滅亡予言は幹部連中にだけ共有されていて、そこから指示が出ているのかもしれない。

オウムと同じ上意下達の組織で横の繋がりは薄い」

稲葉「そうですか！ それは怖い話を聞きました！ 持ち帰ります！」

川瀬「なあ、あんた他にもオウム信者送り込んでないよな」

稲葉「どうしてそんなことを？」

川瀬「違うんじゃない」

稲葉「居たんですか？ それらしい人が」

川瀬「元オウムなんてどこにだっている」

太陽が分厚い雲に隠れて、室内は暗くなっていく。

稲葉「へえ。まあでも、同情しますよ。どこに行っても馴染めないでしょう。人を殺した罪悪感もあれば人を救えなかった無力感もあるかもしれない。世間なんていい加減なもので一度身についた偏見はいつまでも消えません。白い物だって噂一つで黒くなる、有罪だって無罪になる。行き着く先は宗教ぐらいなんでしょうねえ」

川瀬「どうしてそう思う？」

稲葉「おかしな想像ですか？　普通だと思っただけ。いや、気分を害したなら申し訳ない。謝りますか」

川瀬「……あなたは私。私はあなた。あなたは私に見たのだろうか？」

稲葉の目を覗き込む川瀬。

少し不安な表情を浮かべる稲葉。

○夢見の会総本部・メイン棟・教主寝室

一人で眠っていた望月が目を覚ますと、ベッドを警官たちが囲んでいる。

激しい恐怖の表情を浮かべる望月。

○病院・病室

川瀬がベッドでぼーっとしていると、向かい側のベッドで写真週刊誌を読んでいた、かつて川瀬が市役所で対応した老婆が、誌面から顔を上げて川瀬をまじまじと見つめる。

その視線に気付く川瀬。

○夢見の会総本部・メイン棟・玄関ホール

警官に連行されていく望月。幹部信者たちに混ざって近江がその光景を眺めているのを望月は見る。

望月「ヒュプノス！ ヒュプノス！」

近江「何を恐れているのですか。恐れるようなことをなさったのですか？」

表情を引きつらせる望月。

○病院・病室

老婆が写真週刊誌を手に川瀬のベッドまでやってくる。

川瀬「こんにちは」

老婆「ねえちよっと、これあなたでしょ？」

老婆、写真週刊誌を川瀬に見せる。

そこには独占スクープとして、夢見の会がオウムの教義を受け継ぐ教団だという内容の記事が載っており、川瀬が

ゲート前で瞑想している写真が実名と前科解説付きで掲載されている。

### ○県庁・知事室

テレビのニュースを見ている瓜生と雨野。そこには夢見の会の信者たち、高台公営災害住宅地の住民たち、猿田の率いるデモ隊、報道陣が見守る中、夢見の会総本部から望月が警察に連れ出される光景が映し出されている。

雨野「ま、こんなもんですわ。私にかかればね。誰だってそうですよ」

雨野、意味深な笑みを浮かべながら瓜生を見る。視線を逸らす瓜生。

雨野「まさか親玉を出してくるとは思わなかったけどねえ。右翼に動揺したのかあ？ おかしいよねえ、このへんであんな右翼は見たことがないんだが、誰がどこから呼んだんでしようねえ」

瓜生のポケットのスマホがバイブして、

彼はスマホを見る。

○夢見の会総本部・ゲート前

田坂兄弟がゲートを開放して、ゲートの外に群がっていた人々を中に招き入れる。

田坂兄「どうぞ、入りたい方は。どうぞ」

田坂弟「マスターの指示ですからみなさんどうぞ」

○夢見の会総本部・メイン棟・食堂

剣持が人混みに紛れて食堂に入っていくと、そこは信者やデモ隊、高台公営災害住宅地の住民たちや報道陣で溢れかえっており、近江の演説に耳を傾けている。

信者が食べ物の人々に配っている。

信者「どうぞ」

剣持「いえ」

食べる者も食べない者も。

近江「私たちはよりよい眠りを求めて集まりました！自分たちがよりよく眠ること、心の平穏を取り戻し、そうして全ての人がよりよく眠るためにです！この施設もそのための施設になるはずでした！でも現実は違いました！私たちがここへ来たことで誰もがよりよく眠れなくなりました！私たちは解釈を間違ったのです！」

聴衆の中の橋本が涙を流す。

### ○県庁・知事室

スマホを見ていた瓜生の顔が真っ青になる。彼が見ているのはツイッターで、匿名のアカウントによる一連の画像ツイート。その画像は夢見の会総本部ゲート前で瞑想する川瀬の写真に始まり、次いで、川瀬と稲葉がファミレスで話しているのを捉えた写真。

### ○（回想）ファミレス

別の席に座っている岐部が気付かれな  
いように川瀬と稲葉をスマホで撮る。

○スマホ画面・ツイッター

画像ツイートは続く。

・震災伝承館の前で稲葉、瓜生、小国、  
我孫子が話している写真。

・乗用車の中で稲葉と雨野が密談して  
いる写真。

○（回想）乗用車の中（夜）

雨野と稲葉が話している。

雨野「役所の派遣社員枠に前科持ちの元オウ  
ムが入ってきたんだとか。これ、資料」

稲葉「それを私に話して……」

雨野「単なる世間話ですよ。どう使うかはあ  
なた次第だから。私は何も知らない」

○スマホ画面・ツイッター

画像ツイートは続く。

・稲葉が出版記念パーティで彦根、曾我部、青山らと歓談している写真。  
・青山が街宣車の中で中年右翼と話している写真。

・避難タワーの屋上で稲葉、青山、岐部が撮った記念写真。  
そのツイートは瓜生が見ている間に一つまた一つとツイートされて、やがて指数関数的に増加していく。

## ○レンタルオフィス・会議室

稲葉と岐部と青山が集まっている。

岐部、ノートPCを見ながら、

岐部「おー、伸びてますねえ。もっと燃料投下しちやいます？」

稲葉「放つとしても勝手に燃えるさ。（青山に）じゃ、撮ろうか」

青山、テーブルの上にセットされた動画カメラの前で姿勢を正す。

青山「人の口に戸は立てられぬ」

稲葉、動画撮影を始める。

青山「あ、どうもこんにちは、えーと、青山光って言います。あの、大手広告代理店の代表取締役の実の娘です。父親の名前は青山猛って言います。なんか、誹謗中傷とかで動画消されたら嫌なんで、えーと、その名前で検索してもらえれば会社名は出てきますんで、そうして下さい。じゃあ、面倒くさいんで、やったこと全部言いますね」

#### ○県庁・記者会見場

大勢の報道陣が集まる中、瓜生が入ってくる。

記者1「知事！ 夢見の会に対する非合法的な圧力はあったんですか！」

記者2「公安警察との関係が取り沙汰されていますが！」

記者3「ツクヨミ神話の捏造にはどの程度関与していたんでしょうか！」

記者4「彦根大臣との贈収賄疑惑について

一言いただけませんか！」

瓜生は何も言い返す気力がない。

○県庁所在地の中心街・広場

街頭演説中の猿田の横に我孫子がいる。

猿田「今日ね、こうやって月読市長の我孫子さんも応援に駆けつけてくれました。どうよ、え？　I R カジノなんてね、絵に描いた餅よ。住民を見とらん！　そうね我孫子さん？」

我孫子「もうおっしやるとおりですよ！　あの静かな月読市がI R 構想でどれだけ破壊されたか！　こりやもう許しがたい！　独裁政治だ！　私も瓜生知事に騙された！　こんな政治は変えないといけない！」

猿田「じゃあ変えようじゃないの！　わたくしく猿田孝彦、皆様の手となり足となつて、変えますよ！　カジノもカルトもいらん！　皆様の一票でどうかその民意を示して頂戴よ！」

聴衆、拍手喝采。

○県警本部・取調室

雨野が一人で座っているとファイルを手にした監察官二人組が入ってくる。

監察官1「公安が逆に秩序を乱しちゃうんだもんねえ。世も末だ」

雨野「困っちゃうねえ」

監察官2「困らないよ。あんたみたいのがいるから我々監察もメシ食えてるようなものだから」

○都心の書店

店員が売り場の入れ替え中。積み重ねた望月の新書「100%の快眠を引き出すユング心理学」をカゴに落とし、空いた場所に岐部の新書を積む。タイトルは「ツクヨミ神話はいかにして捏造されたのか　あなたを操るスピル（情報操作）の仕組み」。〇

積み重ねた本の脇に店員は岐部の顔写真の入ったPOPを置く。一人のサラリーマンがその本を手にとったのを皮切りに、次々と別の手が本を取っていく。カメラが引くとそのコーナーには岐部とネット論客の対談本が何冊も並んでいるのが分かる。

## ○ユーチューブ動画

レンタルオフィスで撮影した青山の動画の続き。

青山「親が憎いとか誰かが許せないとかそういうのじゃないんですけど、なんていうか、広告代理店とかテレビがイメージだけで世の中を変えていく感じがフェアじゃないなあって思って、じゃあ、どんな風にフェアじゃないか自分たちで見せつけてやるかって。大道廃れて仁義あり、かな？」

再生数は五十万を超えるところ。評価はグッドが大多数。

○右翼の街宣車の車内

中年右翼と後輩右翼がその動画をスマホで見ている。中年右翼は嬉しそうに、

中年右翼「これ、知ってる人」

後輩右翼「へええ」

中年右翼「これね、次に来るユーチューバーだから。サイン貰ったところか？」

○夢見の会総本部・管理棟・会議室

以前アルテミスの案内で施設を取材したテレビクルーが撮影する中、幹部信者たちと大道、その弁護士、近江が話し合いをしている。

プロメテウス「今までの説明で夢見の会の教義がオウムとは一切関係がないこと、教団の意志決定過程に元オウム信者が一切関わっていないことは、ま我々にとっては自明のことではありますが、改めて証明されたかと思えます」

頷く望月。続いてマスター・ヘルメス  
(39)が話し出す。

ヘルメス「ええ、じゃあ、もし追加の議題な  
どなければ、本日の公開幹部会は――」

近江「私がマスターの称号を剥奪される直前  
に大道は私に性行為を要求しました」

突然のことに固まる男性幹部たち。

望月「そんなことはありませんよ」

近江「彼はその目的を私をより深い眠りに導  
くためと語りました。私はその要求を断つ  
たために降格させられたと考えています」

望月「マスター・ヒュプノス、それは被害妄  
想じゃないかな。名誉毀損だ」

アルテミス「グラウンドマスター、それなら、  
あなたが私の体を求めたのは恋愛感情から  
ですか？」

カメラと男性幹部たち、一斉にアルテ  
ミスに注目する。

女性幹部たちは大道を冷たい目で見る。

望月「……マスター・アルテミス、私は世事

には慣れていない。一生を良き睡眠のために捧げてきた。そうだ、私は君を愛していた。君たちをと言った方がいいかもしれない。しかしもしそのことで君たちに不快な思いをさせたのなら、素直に謝りたいと思う。愛の伝え方が以前の私にはわかっていなかった。本当に申し訳ない」

頭を下げる望月。居心地の悪そうな男性幹部たち。

そこに、北原みち子の豪快な笑い声が響く。北原みち子が睡眠中の北原さちの車椅子を押して部屋に入ってくる。

みち子「眠りに人生を捧げたっていうのはね、これぐらいになってから言うもんだ。見てごらんほら、こんな時でも眠つとるわ」

顔を上げてみち子を見る望月。

ヘルメス「すいません、部外者の方はお引き取りいただけますか」

みち子「部外者だって。あのお兄ちゃん知らんのかね。あなたはよく知ってるね、何度



で撤回しました。責任を取って知事の職を辞しました。このコロナ禍でその判断が正しかったことは証明されたと思います。インバウンドや外需を頼りにした町作りは足腰がもろく長期的に見れば決して住民のためにならない。オリンピック、中止しましょうよ！ 東京都知事は中止を決断できるんです！ その覚悟が私にはある！」

聴衆たちの拍手喝采、声援の嵐。その盛り上がりを、聴衆たちから離れたところ立っていた稲葉が、冷ややかに眺めている。

### ○中華料理屋

稲葉と青山と岐部が食事をしている。

稲葉「昨日見たよ、アベマ」

岐部「はは、どうも」

稲葉「いいなあ、儲かってるでしょう。一介のブロガーが今や世代を代表するネット論客だ。今日はおごってよね」

岐部「いや稲葉さんカネあるでしょう。え、  
今は何やってんすか」

稲葉「そりや言えないよ。知ってるじゃない、  
君たちなら」

岐部「でも何かはやってるんでしょ、また  
なんか怪しいことを」

稲葉「そうね、悪名は無名に勝るって言うし。  
いくらでもいるんだよ、白いものを黒いも  
のにしたい奴、黒いものを白いものにした  
いやつ、君たちみたいに世間に一泡吹かせ  
てやりたい奴もさ」

岐部「どっちが使われてるのかわかったもん  
じゃないっすねえ」

稲葉「そりやこっちだよ。瓜生さんにだって  
タレント時代に何件示談交渉に行かされた  
ことか」

岐部「え、それ聞かせてくださいよ」

稲葉「嫌だよ。言うじゃんアベマで」

岐部「言いますね」

稲葉「青山さんは、今どうなの？」

青山は少し離れた別のテーブルを眺めている。

青山「晴天の霹靂」

稲葉と岐部もそちらを見ると、近江と北原さち、アルテミスが談笑している。

岐部「狭い国だねえ」

青山「まだ名誉毀損の裁判やってるとか」

岐部「望月と？」

青山「はい」

岐部「狭いなあ」

稲葉「狭いから誰もが土地を奪い合う。そして新しいものは生まれない」

食事に戻る三人。

岐部「冷たいっすねえ稲葉さんは」

稲葉「そうかな？ あの教団で起こったことだって結局は単なる権力闘争じゃないか。革新と保守、進歩と伝統、中央集権化を進めて教団の規模を拡大するか、拡大を諦めて民主的な教団運営を維持するか、その方向性の違いでしかない」

青山「そういえば終末論って結局あったんですか？」

稲葉「さあ。あったのかもしれないけど、別に珍しいものでもないから。終末論なんて世界宗教はみんな持つてるじゃん。俺だつてこんな世界さっさと終わればいいって思ってるよ」

嘲るように笑う稲葉。

岐部「なんか可哀想っすねー、あのオウムの人が死にかけてまで取ってきた話なのに」

稲葉「カネはちゃんと払ったって」

青山「あ、来た」

稲葉、咳払い。近江たちが食事を終えて店を出ようとして、稲葉たちのテーブルの横を話しながら通り過ぎる。

目を合わせないように無言で食事を続ける稲葉たち。通り過ぎた後、

近江の声「赤じやない方がよかった？」

稲葉、その言葉に振り返ると、そこは中華料理店ではなく、クリスマスの夜

のイルミネーション広場。

○（回想）イルミネーション広場（夜）

赤い服を着た稲葉の恋人・涼子が数年前の稲葉に話しかけている。

稲葉「そうじゃないけど、なんていうか、牛が突っ込んできそうな色だ」

涼子「なんだよそれ。性格悪いなー」

稲葉「牛が来るぞ。怖い怖い。逃げよっ」

稲葉、笑っている涼子の背後に、イルミネーションの見物客をはねてこちらへと向かってくる暴走乗用車を見る。

○中華料理屋

会計を済ませている近江たち。冷や汗をかいてそれを見つめている稲葉。

近江が視線に気付いて稲葉を見ると、稲葉はその視線から逃れるようにテーブルへと視線を戻す。

青山「あ、自分最近はゲーム実況とか主にや

ってます」

岐部「今かい。（稲葉に）大丈夫すか？

え？」

無言の稲葉。手が震えている。

○眠り寺近辺の畑

小国と井坂ら災害公営住宅地の住民たちが水田の草刈りをしている。

その表情は穏やかで満ち足りている。

ヘルメスが山の方から下りてきて叫ぶ。

ヘルメス「そろそろ！ お昼寝！」

小国たち「はい」

○眠り寺・境内

境内には信者用の眠り舎が増設されていて、炊き出しのテントもある。

テントの周りでは農作業や建物の補修、増築作業を終えて泥だらけになった元幹部信者たちが白米と野菜汁の食事をしながら談笑している。

○同・眠り舎

信者たちが雑魚寝している。

○同・本堂

内陣には布団に寝かされた即身仏が置かれており、その前であぐらをかいた北原さちが眠っている。背後には同じようにして眠る信者たちが数十人と、それを見守る宮司。

眠りながら頭から床に倒れた信者に宮司が近づいて、姿勢を戻す。

○高台災害公営住宅地

ゴーストタウンのようになっていて、人気はない。夢見の会反対のビラが風に舞っている。

○夢見の会総本部・ゲート前

田坂弟が荷物をワゴン車に積み込んで

助手席に乗り込む。運転席の田坂兄が、  
田坂兄「もうない？ 全部持ってきた？」

田坂弟「オツケー」

田坂兄「山口まで行くんだから途中で引き返  
すとかヤダからな」

田坂弟「オツケーだってば」

車の外には膨らんだリュックを背負っ  
た橋本と、手ぶらの川瀬がいる。

橋本「本当に来ないんですか」

川瀬「いつか気が向いたら」

橋本「絶対行かない人の言うことじゃないっ  
すか」

川瀬「そうね」

橋本「だったらいいんですよ、何も解体工事  
が始まるまで残らないでも。川瀬さんもう  
部外者なんだから」

川瀬「ちゃんと見届けたいんだよ。オウムの  
時はできなかつたから」

橋本「そっすか」

ワゴンに乗り込もうとする橋本。と、

踵を返して、

橋本「あの、めちやくちや急かもしれないすけど、川瀬さんがオウムだってチクったの自分なんすよ。役所に転入届出しに行ったら窓口に川瀬さんがいて、それで、俺はさ、俺は中学にも入学拒否されたんですよ。オウムの子供だからって。俺が何をしたって言うんですか。俺は自分でオウムに行ったわけじゃないんですよ。それなのに川瀬さんはさ、当たり前前の顔して役所で働いてて……」

言葉を詰まらせ涙ぐむ橋本。川瀬は彼を軽く抱擁する。

川瀬「君には君の道があるさ。向こう行ったらゆっくり寝な。寝て忘れればいいよ。そっちの方がこっちも助かる」

無言で頷く橋本。それから橋本はワゴンに乗り込み、

橋本「来て下さいよ、気が向いたら」

川瀬「眠れなくなったら行くよ」

橋本はドアを閉め、ワゴンは発車する。川瀬は遠ざかっていくワゴンをしばらく眺めて、それから廃墟と化した夢見の会総本部の施設群を眺める。そこにはもう誰も残っていない。

地面に目を転ずると、そこにはデモ隊の残していった手持ち看板やビラ、高台公営住宅地の住民たちの残していったキャンプ用のイスや食べ物のごみなどが散乱している。

× × ×

施設清掃に使っていたホウキとチリトリでゴミを集めてゴミ袋に回収している川瀬。

そこに散歩中の剣持がやってくる。

剣持「やったらやりっぱなしだ。誰も後片付けのことなんか考えやしない」

川瀬「申し訳ありません。もうじき解体工事が始まりますからご安心下さい」

剣持「あんたまだ残ってるの」

川瀬「私はもう教団は抜けましたんで。ただ汚れてるのが気になって個人的に掃除してるだけです」

剣持「そう。しかし、なんだか、ここらへんもめつきり寂しくなったなあ」

黙って掃除を続ける川瀬。剣持、何も言わずに掃除を手伝い始める。

剣持「あなたパチンコとかやんない？」

川瀬「やらないですね」

剣持「なんか戒律とかあるんだ」

川瀬「そんなのないですよ。もう宗教やってないって言ったじゃないですか。カネを無駄にしたくないだけです」

剣持「そりゃわかってるけどさ、浪費ってのも立派な娯楽じゃない？」

川瀬「もうちよっとマシな浪費の仕方があるでしょう。なんだ、サウナ行くとか、漫画読むとか」

剣持「なんかお勧めあるの」

川瀬「え？」

剣持「漫画」

川瀬「漫画……漫画読まないからなあ」

剣持「適当なこと言うなあこの人は。ええ？

人のパチンコ趣味バカにしといて」

川瀬「いやいや、バカにしてはいないですか  
ら。別にね、そういう趣味もあっていいけ  
れども、ただ勿体ないなってさ」

剣持「そんじゃあ瞑想は勿体なくないの？」

川瀬「瞑想は勿体なくないでしょう」

剣持「でも瞑想で儲からないじゃない」

川瀬「パチンコだって儲からないじゃないで  
すか」

剣持「儲かるよー」

川瀬「嘘だあ」

二人は談笑しながら掃除を続ける。

(了)

【参考文献】

『日本書紀』中公文庫